Human

6か所目の勤務地で南九州カンショの難題解決を目指す

暖地畑作物野菜研究領域長
長田　健二（ながた　けんじ）

出身は種子島

葉たばこ栽培が中心で、自家消費用の米作りと繁殖牛2頭を飼育する小さな農家に生まれました。父母二人での農業なので加勢が必要であり、春はたばこの移植作業、夏は稲刈り（早場米地帯）、秋冬は育苗用の落葉集めをよく手伝っていました。一人息子ですが大学進学を許してもらい、進路は自然と農学系を選択、大学卒業の際も、農業に貢献できる職業として国の農業研究機関の研究職に就くことにしました。

稲の栽培研究に従事し、多くの地域を経験

水稲の栽培分野に配属となり、飼料用、業務加工用品種の多収栽培や高温障害による米品質低下の軽減を主なテーマに研究してきました。農研機構が開発した業務加工用米品種の栽培マニュアルや、米に亀裂が入る「胴割れ米」の発生軽減技術が、これまで私が生産現場向けに提示した主要な成果で、業界誌での解説記事や50回以上の講演を通じて情報発信を行ってきました。この間、採用時のつくばでの研修を含めると、5か所の研究拠点を異動してきました。研究の継続性から転勤には当初、ためらいがありましたが、振り返ってみると、各地での米作りの課題を肌で感じることができ、自然、生活環境や文化の違いなど、楽しめることが多かったと感じています。

南九州で広がる病害の早期克服にむけて

今年度4月から、6か所目となる九沖研都城研究拠点に異動となり、高校卒業以来約35年ぶりに南九州に戻ってきました。この地域で深刻な被害をもたらしているサツマイモ基腐病の早期克服が、当拠点で現在行っている研究における最大のミッションです。これまでに育成した抵抗性品種や防除対策マニュアルは現場での活用がいち早く進められており、今年度も、蒸熱処理による種イモ消毒技術の標準作業手順書を作成したほか、青果用の抵抗性品種として新たに「べにひなた」をリリースしました。外部からの問い合わせや研修希望も多く、研究に対する期待を強く感じます。カンショ生産に関係する方々の本病害克服への願いに応えられるよう、拠点の皆さんの協力のもと、被害の早期収束に向けてしっかりと取り組んで行きたいと考えています。

▲「べにひなた」のプレスリリース記事はこちら

▲「べにひなた」の焼き芋